

★わたしの意見

くらしに

心の文化を

山本 敏雄

〈兵庫県文化局長〉



先日、あるご婦人から蘭の一鉢をいただきました。あまりの見事さに花弁に手をやってみると、なんとこれが紙で造った造花。大変失礼な話ですが、素人の手でよくもこんなに立派なものが——と驚いた次第です。

そのご婦人が話されるには——デパートの手芸品売場で見かけ、何となく自分でも作れそうな気がして材料を買って帰ったのが始まりで、何度も失敗をくり返しながらも根が好きなのでしょうか、いつの間にか部屋中花でいっぱいになりました。これを知った隣のおばさんも見よう見まねで花づくりの楽しみを覚えましたが、喜ばれたのは若いお嫁さんの方で、おばあさんの小言も聞かなくなり、家の中はきれいになりましたとのことでした。この頃は週一回養老院へ奉仕に行っていますが、ここでも大変喜ばれてね——。

×

×

この四月から、兵庫県では文化局が発足しました。県民一人ひとりの生活の中に精神文化を開花させてもらうために、優れた芸術文化とのふれあいの場をつくり、心のめざめを啓発し、そしてお互いの行動と参加によって、心豊かな地域社会を創造しようと呼びかけています。

文化というと、ともすれば古典芸能やクラシック音楽だけのように思われがちですが、実は文化こそ身近な生活の中の心の糧であり、いきがいをつくる要素であると思います。このご婦人の花づくりも立派な文化であり、そこに人間のいきいきとした生命の躍動を感じます。

このところ文化センターなどで、趣味の教室にぎわっています。これとても暮しの中に文化が芽生え、育っているものと思いますし、ちょっとした創意と努力によって、私たちの生活の周辺も、ずいぶんと明るく住みよくなるのではないのでしょうか。

物質としての富と、心としての文化が調和するところに「しあわせの原点」があると考えるとき、いまこそ心の豊かさの充足をみんなで心がけたいものです。

MAKE UP WITH ROYAL

50年の 伝統と信用 を誇る

度付サングラスお誂えの絶好期
です。



 **神戸眼鏡院**

元町店・元町3丁目 ☎(321)1212代表

三宮店・さんちかタウン ☎(391)1874~5

元町店は毎水曜日が休みです

三宮店は第2、第3水曜日が休みです

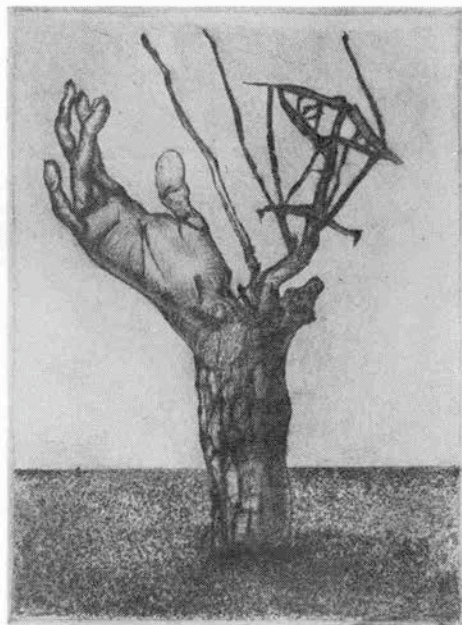
三宮店が
売店と喫茶室の装いを
かえました
ぜひ見てやって下さい
お待ちしております



このマークの店でお買求め下さい

本店 生田神社前 TEL(331)1694
三宮店 神戸大丸前旧市電筋 TEL(331)2101
さんさか店 三宮地下街スイーツタウン TEL(391)3539

題三想隨



カット／上野省策

神戸

その自然と私

上野 省策（画家）



いつの頃であったか、神戸市の山手、学校や、教会の多い通りを、西灘駅ちかくの動物園の方へ下ってきた。

ふと、目をあげると、大阪湾をのぞむ、広い、広い、眺望が目の前にひらけた。

季節は春であったか、全体に、青みがかった灰色の眺め、左手には、はるかに、なだらかな六甲の山並がつづく。私の生まれた越後

にも、かつて住んだ東京にも、決して感じることもない、不思議に温かい、そしてハイカラな情緒が、たちまち私の全身に流れた。この時の情感は決して忘れさることのない、それほど深いものであった。

私が神戸の街に最初に関心をもったのは、ずっと以前、小松益喜氏の街と店の絵が、展覧会に並んだときであった。この絵を見て、私は、はっきりと作家の名前と神戸の街を記憶した。神戸大学に赴任したとき、この山と海にはさまれた街はすでに小松さんの絵の印象とはすっかり違った街になっていた。しかしなんとなく、ハイカラで温かい感じは、小松さんの絵を思い出させた。当時、教育学部は赤塚山にあったが、山を下って

帰途につく道は全くたのしかった。古い街道の方を通って、角の酒屋で一杯ひっかけ降りてゆく。

かたわらに石だたみの小流れがあつて、澄んだ水が潺湲と流れる。昔、酒づくり用の水車をまわした小川と聞いた。深田池の近くには大きな料亭があつて、そのあたりの樹々の緑は多彩をきわめた。とくに晩春、初夏の頃には、黄緑、白緑、金茶色、緑褐色、青緑、それにまじって黒ずんだ松の緑、等々、口では言い表わすことのできない緑の大交響楽であつた。こうした色彩は静岡以北では見ることができない。私は小出楢重、梅原龍三郎、安井曾太郎などの画家を生んだ関西の土地を感覚的に理解した。六甲山のふもとに通いながら、ついに六甲山にのぼらなかつた。絵にも描かなかつた。のほれないのは年の故であるが、絵に描かなかつたのは、村上華岳の六甲の絵が頭の中にあつたからである。

華岳は明治大正の画家の中、真に天才とでもよべる最高の画人であつた。その偉大さは年とともに正しい評価をうけるだろう。神戸の花隈にすんでいたことも知っていた。ともかく華岳の六甲山を描いた優れた作品には、只美しいとか、深い調子があるとかいうよりも、何とも言えない靈氣がただよ

っている。いつかいつかと思いつつ、私などは死んでゆくだろう。この六甲山を昨年の秋、友人につられて、ケーブルで山頂から見おろした。これは素晴らしい景観であった。山と海、そのひろがり、まことに偉大な自然のいとなみを見る思いがした。この風景をもっと日本中のの人に見てもらいたいと思う。今でも、月二回学校に教えにゆく。

うれしいことだ、こよなく愛する街神戸。私の心は、一生、神戸をはなれないだろう。

一絃琴の自家撞着

小池 義人

(須磨寺副住職・一絃須磨琴保存会会長)



先日、私たちの須磨琴保存会が主催で一絃琴の全国大会を開催したのであるが、おかげで、押すな押すなというほどではないまでも、終始大人り満員の盛況裡に大会を終了することができた。どこで聞きつけたのか、中には東京、名古屋、松江、広島のような遠隔地から、わざわざ来聴された方もあったのには、主催者の私たちの

方が驚かされたことであった。

ところで、その日、同じく来聴者の某邦楽器店の社長がもらされた言葉に私は考えさせられるものがあった。「こんなもの凄人気は他の邦楽の演奏会では見たこともないし、また、絶対にあり得ないことですよ」というのである。勿論、その社長はこの言葉を私たちに對する賛辞としてもらされたのであるし、私としてもこの大会が他の邦楽では「絶対にあり得ない」ほどの成功をおさめたことを喜んではいるのである。

しかし、この言葉は、少なくとも現在のところ、一絃琴が他の邦楽とは違った面で受けとめられていることをいみじくも物語っている。つまり、一絃琴が珍しいからこそ、これだけの人気を博したのであり、もしも一絃琴が他の邦楽なみに普及していたならば、今次

の大会でもこれだけの人は集まらなかったであろうということなのである。

私は平素、私たちの保存会のなかで、一絃琴が珍しいという理由だけでものではやされることに甘えていてはならない、と常に会員たちを戒めて来た。ただ古くて珍しいというだけならば、南方の土人の音楽と選ぶところがないのである。一度聞いたらもう沢山だというものではなくて、何度でも繰返し聞きたくなるような、音楽としての鑑賞に耐え得るだけに質を高めねばならぬ。そうしてこそ、一絃琴が邦楽の一ジャンルとしての存在を認められるようになるはずだとも説いてきたのである。

過去十年間、私は同志のかた達とともに、須磨に生まれたという郷土芸能一絃琴の復興に普及のために情熱を燃やして来た。今次の大会も一絃琴のための啓蒙運動の一環として企画したものであった。そして、今後ますますその普及のための努力をつづけて行きたいと考えているが、全国各地で一絃琴の清雅な響きが聞かれる日の到来が私たちの夢なのである。それは、一絃琴を珍しい芸能でなくする道である。とすると、先の社長の言葉を裏返して考えれば、私たちが努力すればするほど、次の大会には人が集まらなくなると



須磨寺で開かれた一絃琴の会

いう結果になりかねない。自家撞着とはこのことであろうか。私は大会が成功に終った今、奇妙な感慨にとりつかれているのである。

六月のみどり

林 中元

《教育植物園園長》

花の命は短かくて……。春、四月のはなばなしから、一転して、若葉にうつる。

若葉の命は……？ 梢のゆれに驚いて足をとめる。春風もさることながら、梢のゆれるのは、冬の間中、忘れていたようである。

五月、六月、若葉、青葉、翠緑がつづく。そして、紅葉につながる。緑の命は長いようだ、ミドリ、みどり、緑という字をいくつ重ねても、昨日、今日の六甲の若葉は表現しきれないものがある。谷は谷で、嶺は嶺で、とにかく同じ樹であっても、それぞれが、目色（芽）が違う。

再度ドライブを通ってみよう。トンネルをくぐると、アカシヤの若葉が道を覆う。白い花房が枝垂れている。鼻をあげよう。甘い香りが、道いっぱい流れている。時に淡く、時に強く、風のみだれるままの香りがそのまま清気、生氣、精気をかきたてるようである。延々と、つづいて、布引水源

池が見える。一本松点までが、甘い道、匂いの道である。水源池を越えた東南の山々、市内では丸山から抜けて、白河に至る瘠地の砂防林、アカシヤのみことな若葉が車の窓をあげさせる季節である。

一本松を過ぎると、緑の雫するを感じる樹陰帯。ドライブの味を満喫させる陰がある。クスノキの樹林だ。ここのクスノキは、水を貯めるための保安林として植えられたものである。五、六十年の結果をしっかりと胸にしまってもraithたい。植林は一日で育つものではなく、五年、十年のものでもない。樹齢の短い桜の五十年の姿は、枯死寸前のものとなるが、クスノキの樹齢は五百年を越えている。相楽園のクス、摩耶小学校のクスがそれである。ここのクスノキは、これからあと何百年とつづいて、多くの人々をいやすものとなる。今生きている私共も、この恩恵を受けねばならない。

花は貧しいが、そのかわり、若芽の美しさが花に倍する。すばらしいものである。一枚の葉ではなく、一本の樹でなく、群れを見てほしい。近くで、見るのではなく、遠く離れて見たいものである。樹海ということばがある。そのことばにふさわしい若葉の海である。その海の色は緑でなく、赤みどりであり、淡緑であり、黄み

どりである。花は一輪一花を賞じることができる。手折られる機会も考えられる。この緑の海原の豪華は花にまさる勢いがうかがわれる。

咲いて散る花、芽から、日々成長して伸びる葉、花の命は短かくて……。

葉の命の長くて、生きる欲びの多いことよ。

若葉は緑と決めてはならない。赤芽のアカメガシ、緑芽のミドリザクラ、だが、クスノキの若葉には色々ある。サクラにも赤芽、緑芽、淡黄色がある。同じ樹で三種美の若芽がおもしろい。

山も奥にはいったという感じのするところに、内陸型の（海岸性に対して）アセビが顔を出す。

アセビの花の純白に対応するように、若葉も赤芽、黄みどり芽、緑芽がある。アセビは、大竜寺の谷間、樹陰から現われ始める。花は葉に隠れてつましいが、若葉は太陽に輝いて、色とりどり。

再度公園に至って、アカマツの幹を透した雑木林の若葉の舞い。クロマツの幹を透した若芽の乱れ。アカマツ、クロマツの交錯の中の幹の春の芽え。このドライブウェイは、六甲の至る所で見られる谷間尾根道の一部にすぎない。

あなとうと 青葉若葉の 日の光 芭蕉

□ある集いその足あと

伴 須美

フラメンコ舞踊団

伴 須美

〈伴須美フラメンコ舞踊団主宰〉



舞踊団のリハーサルから

ひとりの人間が踊ることです。示した怒り、あるいは楽しさ、それを見る者が共感できる時、その踊りはほんものといえる。私たちは自分の心を表現したいがために踊り続ける。

しかし、見る人が舞踊に心を感じ感動するまでになるには、その舞踊を生かせるだけのテクニクがなければならぬ。フラメンコ舞踊の基礎テクニクは、決してたやすく体得できるものではない。

足の打ち方、パリージョ（カス タネット）の首、腕の使い方、指先の動き、裾さばき：身体のみまで一分のスキもなく、同時に神経が行きわたっていないと足りない。手の動きで、足の打ち方で喜びの、苦しみの微妙な感情を伝えなくてはならない。スペインのすぐれた舞踊家ロサリオほどにもなれば、本能の命じるままに踊って、それがまさに優雅に、見るひとを感動でつき動かすまでに完成されたものであるが…。

私は、好きだからフラメンコを踊る。自分をなにより正直に表現できるフラメンコを、好きだから踊る。ただ踊りたいだけ。死ぬまで。そして少しでも完成への高みに届くための努力を続けるだけ。

純粹の、ほんもののフラメンコが踊れ、それをひとが見て、あ、

これはこの人のフラメンコになっている、と感じてもらえるようになれば、すばらしいことだ。

踊りを見て、人間の生きていく命の流れ、そういうものを見るひとに共鳴させることができれば、その踊り手は成功したといえる。

私自身、はじめてスペインへ渡った時、涙しながらフラメンコを見た。ほんとうのフラメンコ舞踊にはじめて触れたようであく然とした。私はそれまでに日本で10年間スペイン舞踊をやっていた。もうフラメンコなんて止めてしまおうか、それとも、もういちど初歩からやり直すか、その時の決意が私の出発点となった。

スペイン人は純朴である。スペインにいた方が私は落ちついてしまう。フラメンコを見ても、そのなかに東洋的な、日本と共通するものを感じる私であるけれど。

私は今また、スペインへ行く予定を持っている。今度は勉強のためだけでなく、私の師であるロサリオが、スペインで私のリサイタルを計画してくれている。来年のちょうど今頃。そしてその成果をまた神戸の舞台に乗せることができると思う。

■伴 須美フラメンコ舞踊団

神戸スタジオ 神戸市長田区明楽町1丁目3

☎691・4739 東京スタジオ 東京都

板橋区板橋2丁目7-9

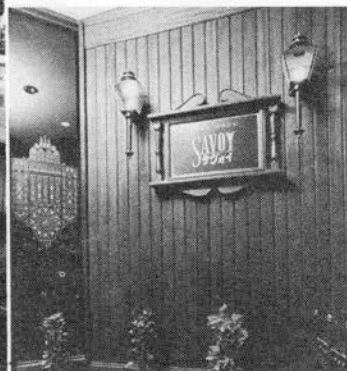
2982 田沢千代子方

☎03・961・

芸術はなんでもそうだと思うけれど、フラメンコ舞踊は人間の心の表現である。ひとが生きていくうえで、喜び、哀しみ、情熱……喜びはまた苦悩につながるものでもあり、スペインのアンダルシア地方に古くから伝わるこの舞踊は、どちらかといえば、鬱屈した感情を念出する表現の方によけいの激しさを持っていたといえるかもしれない。



新しいと
ゆうことは
いつまでも
古くならない
ことです。



NIKKEN MEMORY SERIES<5>



カクテルラウンジ
サヴォイ
小林 省三

「いい店じゃないか、やっぱり神戸だ。」が初めてサヴォイにみえたお客様の多くこの店内を見回して、そうおっしゃる。この4年余り、どれだけの方からそうい嬉しうたと思いをし、自信を深めさして貰っている。実用面でも2階以上の店が一番心配する防水面も完璧である。店側の人間とすれば約10時間位は店の中で過ごすのだから、こちらの快適性と趣味性を大事にしたい。しかし、お客様が感じる店の魅力はそれとは別の場合が多い。その二つの必要点をいかにうまくカクテルするか、店作りの腕前だと思ふ。その点での日建スタッフの腕前は超の字付きの一流である。改裝の時も、絶体日建だから、残念というか辛いというか、この顔の造作の改裝を先にやって貰おうかな。

店舗づくりのプロフェッショナル

信頼される



(株)神戸日建

神戸市萐合区御幸通3丁目1

PHONE 078(251)3525(代)

このたびは、火災の為、皆様には御迷惑をおかけしましたが、おかげさまで平常通り営業致しております。御見舞、有難とうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

終らない賭け

矢崎 泰久

〈話の特集編集長〉

え・小西保文

「ア」

明子の口から、かすかな声もれた。体を固くして、しがみつこうように強く腕に力を入れている。眼はずっと閉じたまま。まるで、セックスを儀式とでも思っているのではないか。

「ア」

のどの奥から、しばらく出すように、再び声をあげた。明子は、依然として、体から力を抜いていない。熱い部分だけが、息づいている。形のいい、しまった乳房が、かすかに揺れている。

「あなたを好きになってしまいそう」

明子の中で、私のはじけたとき、かすれた声が耳元で囁いた。言葉の底にある、明子の心が伝わってきた。私は、更に強く明子を引き寄せ、荒い呼吸を押さえながら、

ら、やさしい口づけをした。密の甘さと、塩の辛さが、舌の先をしびれさせた。



ポーカーが好きだ。ことにブラフで勝つときの喜びは格別である。あらゆるゲームは、自分の手が良い場合でなければ勝てない。ポーカーだけは違う。悪い手であっても、勝負に勝つことができる。そのためには、相手の心理を読まなくてはならない。そして、自分の手を知れないように、細心の注意を払う必要がある。

ごく稀に、よい女にめぐり会う。抱きたいと思う。しかし、恋におちるのは、とても面倒だとも思う。恋をすれば、何もかも捨ててしまう自分がこわい。できるだけ軽く、女と触れ合って、さりげなく別れたい。四十を過ぎると、悲しみや苦しみに弱くなる。さりとて手放して

泣けるほどの純情もない。

正面きつて向い合っていくのなら、男と女の関係も、それほどテクニクはいらない。よい手が入ったときのボーカーと同じだ。堂々と戦っても勝てる自信はある。

はじめから別れるつもりで、しかも、しつとりとした情事を持ちたいという欲望がある。身勝手で、欲張りで、それがわかっているだけに、ひどくうしろめたい。

明子は、体の線の美しい娘だった。細っそりした外見ではあったが、内側に丸く肉がついているように感じた。整った顔つきは、やや冷たいものを与えるが、笑顔がすばらしかった。上品さの中に、妖しい魅力があつて、じつと見つめていると、心が吸いとられてしまいそうであつた。

したい、と思った。だが、ちょっと間違ふと、のめるぞ、とも思った。だから、これはブラフで攻めてみるしかない。とことん賭けてくるようであれば、深傷を負う前に、こちらがダウンすればよい。しかし、そんな気持を見すかされたら、はじめから勝負にならない。いい手があるように、自信たつぷり、はじめの賭けをやらなくてはならない。

明子はテレビディレクターである。神戸の第四突堤に停泊中の英国豪華客船「クイーンエリザベスⅡ」の取材で東京から数人のスタッフと共に来っていた。初対面ではなかったが神戸で会ってみると、何かしら親しいものを感じて、私たちは「アルパトロス」で夜更けまで酒を飲んだ。ジャズの生演奏がすっかり気に入ったらしく、明子は、楽しそうだった。

「ね、今度神戸へ来るのはいつ。私も、そのとき来るわ、街も坂道も港も、そして、いろいろな店も、全部好きになったの、でも、あなたと一緒にだったら、きっと楽しいと思うのよ。ね、いいでしょう」

「国営放送は、そんなにヒマかい」

私は、その場限りのジョークと受け流して皮肉っぽい

返事をした。明子は、黙り込んでしまった。私のブラフは、まず成功したようであつた。あとは、おなじみのボーカーフェイスというわけである。

『キャンティ』でチーズパンを食べていると、明子が入ってきた。一カ月ぐらい経っている。

「探しちゃった。だって、この店、本店と支店とあるんだもの。エトランジェには、ちゃんと教えるのが礼儀よ」

クレージュのスポーティなパンタロン・スーツが、よく似合っていた。

「ね、わたし神戸へ何しに来たと思う」

明子は、はしゃいでいた。

「そんなことわかつてるけど、俺にいわせたいの」と私。

「あら、絶対にわからないわよ。いつてみて」

私は、じつと明子の眼を見つめながら、ちょっと間をとってから、

「俺に抱かれるため」といった。

明子は不意をつかれたように、私を見ていた。手にしたワインを思いきりよく飲んで、グラスを置くと、両手を頬にあてた。

「わたし、もう赤くなつてゐるみたい。」

神戸でだけ会う。私の情事は、ボーカーのゲームのように、順調だった。手の中にあるカードは見せない、これが私の誇りだった。ある日、明子と港を歩いていて。初夏というのに、六甲おろしの風が冷たかった。

「終らない賭けもあるわ。はじまらない恋を背負って漂流するつもりなら」

明子が、突然、詩を詠むような調子でいった。私はガラと音を立てて巻きあげられる碗を横に見ながら、自分の敗北を知つたのだつた。

(終り)

□ある現代美術家の非芸術的なレポート〈7〉

鉄粉と石ころと水槽

河口 龍夫〈造形作家〉

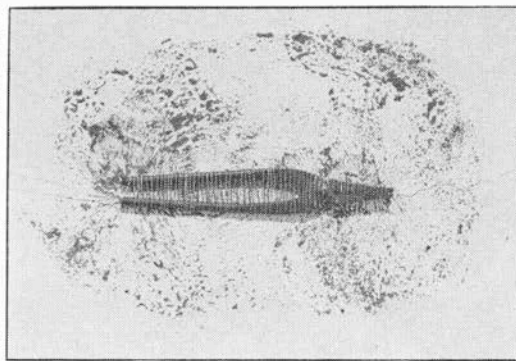
パリ市街の散策を続けている間に、ようやくにして、I・A・T運送会社より日本から送った作品の材料と道具類の荷がパリ・ビエンナーレの会場に届いた。

その荷を見た時、なつかしくうれしかった。荷を注意深く解き、作品材料が破損していないか一つ一つ点検しながら床に置いていった。まったく破損はしていなかった。ひと安心だ。あとは日本で用意できなかった材料を購入すればよいわけだ。

ところで、私の展示空間の電気配線が、今だにできていなかった。まだまだ待たされそうだ。

そこで、時間の都合や、用意しなくてもパリにはかならずあると思われたため買い求めなかった材料の購入を始めることにした。

すでに、変圧器の用意は、一〇〇ボルトの電流を配電してくれることで購入の必要がなくなったことは以前に言ったが、その他に、〈Relation - Electric current〉(関係—電流)と題する作品は、鉄片や銅片を床に置いたり、壁面に立てかけ



〈Relation—Electric current〉(関係—電流)の磁界の部分

たりして、電気を直接それらの物質に流し、それぞれの物質が接点を持つことによりつながり、大きな磁場ができるとともに、電流によって結びつけられた一つの〈関係の場〉が出現するのであるが、その流れの一箇所に、ペンチに銅線をコイル状にまきつけ、ペンチの形状の磁界を出現させる手順であった。

しかも、その状態を視覚化するために、どうしても鉄粉を必要としたのであった。

〈Relation—Energy〉(関係—エネルギー)と題するスケールの大きな作品には、その一つのパートとして、熱を十数箇の石に伝導させるため、人間の頭ぐらいの大きさの石を必要とした。また、別のパートとして、水をパイプヒーターの熱で水蒸気にするための容器として、直方体状の金魚鉢を用意したが、スペースの広さとの関係で、もう少し容積の広い水槽が必要に思われた。

とりあえず、配電を待っている間に、鉄粉と石と水槽を求めに行くことにした。といっても、神

戸でなら、鉄粉はどこか知っている鉄工所で、石は六甲山のふもととか、川のほとりで、水漕はどこぞデパートの金魚売場とうまくゆくのだが、地理不案内の上、言葉が不自由ときているので困ってしまう。ノートルダム寺院に行くとか、どこか観光地に行くほうがはるかにやさしいようだ。もし、通訳の正木氏の協力がなければ大変であっただろう。

まず鉄粉は、パリの郊外まで出かけて、鉄工所らしきところで拾い集めたりしたが、いずれも大さすぎて磁界を作るには不適當であった。もちろん、鉄粉など売っている店は、長年パリに住んでいる正木氏をもってしても見つけることはできなかった。次に石であるが、石といっても私の求めているのは、自然石であって、岩を人工的に砕いた石ではなかった。つまり、それ自体で一つの完結し、自立した形態を持っている石がほしかったのであった。実は日本で必要な数だけ石を用意したのであったが、ある人から「石ころぐらい、パリにだってあるよ」と、アドバイスを受けたため、パリへ送付する荷の中から石は除外されたのであった。ところが、パリには、自然石のようないわゆる石ころは、かいても見当らなかった。パリ市を流れているセーヌ河は泥で、石ころなどなかった。私がパリ市内で、求めるイメージにちかい石ころを見つけたのは、ガソリン・スタンドに装飾として配列されている石であり、日本大使館の中庭にてであった。

日本大使館と言えば、パリに着いて間もなくビエンナーレ参加メンバーと共に挨拶に出かけたのであった。なにしろ国費で参加できたのであるし、ホテルの手配など色々とお世話になったもの

だからその御礼もあった。その時、大使館の人に「ひとつお国のために、頑張ってください」と言われたのを奇妙な気持ちで聞いたのを思い出す。

もし、石が手に入らなければ、大使館の石ころを頂くか、ガソリンスタンドのを拝借するしか仕方がないようだった。今度は水漕であるが、パリ市内の金魚屋をかなり見てまわったが適当な大きさの水漕はなかった。ところで、金魚を売っている店には、犬や猫や鳥も売っていたが驚いたことにコーモリをペットとして売っている店があった。

結局、鉄粉は、日本から持ってきた鉄片をヤスリで根気よくこすってつくるしかなかった。

そして、石ころは、たまたま私の展示部屋の隣が韓国の作家で、その内の一人が自然石を作品に必要としていた。どこでどう見つけてきたのか石ころを手に入れ、親切にも私の分まで用意してくれたのだ。いったいあれだけ捜して見当らなかった石ころをどこで見つけたのだろうか。何のことはない。聞くとところによると、建築材料屋で一袋何がしかで買ってきたのであった。

理想的な水漕は、求められなかったもので、日本から持参した金魚鉢を使用することにした。

アトリエで作品を完成させ、その完成した作品を展覧会に出品する場合には、くどくどと記したような苦勞は生れなかったであろう。今回のように現地で材料を求め、或は送付した材料で、その現場で作家が制作することによって成り立つような、展示空間と密接に関係をもつ臨場的な場合、展示空間と密接に関係をもつ臨場的な場合、現実の時間や空間そのものを作品の重要なエレメントと考える私の場合、その困難さを克服することが、必要不可欠な問題であった。

経済ポケット ジャーナル



★若手経営者の集まり

「神戸経営研修会」設立
このほど、神戸市の中堅企業の経営者ら十五人が「神戸経営研修会」を設立した。これは、角南猛夫角南商事社長、玉井新吉神戸船渠工業社長、野澤太一郎ノザワ社長の三氏が発起人となつたもので、中堅企業として経営のやり方などの情報の交換などを行い、積極的に神戸経済の基盤を支えて行こうというものである。現在のところ先の三氏以外のメンバーは次の諸氏である。

上島達司上島珈琲本社社長、岡崎藤雄内外ゴム社長、川西章二川西倉庫社長、小林博司小林桂専務、白川寛お菓子のコトブキ社長、瀧川博司兵庫トヨタ自動車専務、竹田剛男関西貿易社長、寺本晃淡路屋専務、東中弘吉同公認会計士事務所社長、西川実大阪西川副社長、畑崎広敏ワイルド社長、浜根義和尾道造船常務。

★さんブラザ五周年迎える

三宮の中心地にさんブラザがオープンして満五年を迎えたが、5月28日午前11時から、さんブラザ二階「九龍」にて五周年記念パーティーが開かれた。



あいさつをする横山社長（左はし）

席上、横山正武株式会社さんブラザ代表取締役は、「現在のC棟だけでは50パーセント、B棟が完成してはじめてスタイル、機能両面において百パーセントとなる」と将来の展望をのべ、続いて宮崎辰雄神戸市長から「神戸の市街地再開

発については、さんブラザをはじめ、三宮周辺のみならずさんが中心となつて欲しい」とのあいさつがあった。その後、各界からのお祝いの言葉がのべられ、小山常務の音頭で乾杯、会場に集つた約百名は歓談のひとつときを楽しんだ。

★〈海からのたより〉完成

五月十一日、神戸市でライオンズクラブ国際協会302W-C地区第21回年次大会が開催されたが、これを記念して在神16ライオンズクラブの会員の賛金によつて国鉄神戸駅前広場にうつられた〈海からのたより〉



〈海からのたより〉の除幕

塔の背後には新宮氏の詩〈海からのたより〉が刻まれた板がはめ込まれている。これらは、新宮晋氏のデザイン及び制作によるもので高さ14・9m、幅2・5m自然風によつて上下回転運動する鉄材及びアルミ材を基材としたモニュメントである（設計朝日建設設計）。午前十一時から式が始められ、新宮氏と宮崎神戸市長の手によつて除幕が行われた。このあと会員一行は大倉山中央体育館まで行進、神戸文化ホールで大会が開催された。

★KOBEOフィスレディ★



河本留里さん（北区）
朝日麦酒株式会社経理部

現代的な美人タイプの女性。高校時代に水泳の飛び込みをやっていただけに、プロポーションも抜群だ。さぞかし水着姿もお似合いだろうと思われる。「体力には自身ありよ」というのもうなずける。当社には一昨年3月入社。経理の仕事もてきぱきとこなす。旅行が好きで土、日曜を利用して遠出するのことも多い。只今、料理学校へ通っているのだが、うも未来のhusのためらしい。（武庫川短大卒）



住友信託銀行

もとまち

大丸西向い ☎321-1131(代)



ボーナスは

住友の貸付信託へ



□ 港 10 景

魔法をかけられた町

多田 智満子〈詩人〉

え・山本 文彦

長年ここに住んで居ながら、神戸という町は、生身の人間が生活している町というよりは、なにやら非現実的なメルヘンの町「魔法にかけられた都市」という感じがする。

山の麓から海岸まで、積み木のような家がびっしりと土を覆っているが、或る朝それらが斜面を這い登って中腹にまで達したと思うと一夕の大雨に土砂と共にずり落ちる。

南北にはしる道はすべて坂道であり、それが少し歪んでいれば、忽ちほどけかけた螺旋となつて、未知の高みへ人を誘う。或いは逆に、その道はうねりながら低きへと向かい、海拔ゼロメートルの地点をこえて、海の深みへひきずりこもうとする……。

というのは、この街全体が海に向つて開かれているからだ。海と陸との境界は櫛の歯状の突堤の凹凸で人工的に仕切られているが、そこには一夜にして塔が立ち、またそのあくる日には、忽然として波間から島がもりあがる。

ポर्टアイランドと呼ばれるこの島が何年がかりで出来たか知らないが、私にしてみれば、或る日気がついてみればそこに島があった、というわけで、まるで魔法としか思えないのである。そして日夜、美しく塗りたてた客船や貨物船がこの港を出入りして、様々な髪色と肌色をした人たちが多様な商品を送りこみ、運び去ってゆく。人間がそこに住むというよりは、珍しい、心をそそる人間が通過する町、そうした港町として、神戸はつねにメルヘンの相のもとにある。

